論文審査の結果の要旨

氏名：木　村　優　介
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：先天性難聴に伴う前庭動眼反射と運動発達に関する研究
　　−内耳奇形の非合併例と合併例の比較−
審査委員：（主 査）　教授　髙　橋　昌　里
　　（副 査）　教授　越　永　從　道　　教授　長　岡　正　宏
　　教授　鈴　木　孝　浩

本研究は、先天性難聴幼児における前庭動眼反射と児の粗大運動発達の関係を明らかにすることを目的とした研究である。

具体的には、聴力検査で 80dB 以上の両側難聴と診断された 186 名の先天性難聴児において漸減回転椅子を用いた前庭動眼反射機能の評価と CT および MRI 画像による内耳の構造評価などを行い、それらと粗大運動発達(頚定と独歩の時期)の関係を検討した。その結果、先天性両側難聴児 186 名中 31 名に回転椅子における回転中眼振反応低下を認め、そのうち 21 名に両側内耳奇形を認めることを明らかにした。またこの反応低下群では反応正常群と比較して優位に頚定と独歩開始の遅れを認め、反応低下群で内耳奇形がある児においては前庭と外半規管の形成異常が統計的に有意に高率に認められることも明らかにした。さらに回転椅子で眼振の低下を認めた 17 名の両院内耳奇形を持つ児の追跡調査では 16 名に眼振の増加が認められることを示した。

以上の通り、本研究は先天性難聴において、中でも前庭と外半規管の形成異常を伴う内耳奇形において粗大運動発達の遅延が生じることを示したものである。さらに回転椅子による追跡調査の結果から、前述のような内耳奇形があっても、残存すると考えられる前庭感覚細胞と前庭神経単位の機能は成長に伴って成熟し前庭動眼反射を獲得すると考えられる結果を示している。

本論文は先天性難聴と粗大運動発達遅延という一見かけ離れた症状が実は神経生理学的に強く関連していることを明らかにしたもので、学術的に価値が高く学位に値する内容である。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以　　上

平成３０年２月２８日